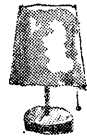


ろくろ



外山 滋比古

ちようど四十歳になったとき、それまで十数年預っていた英文学の月刊誌の編集を離れることにした。いつまでも同じことを続けていけば、雑誌のためにはむろんのこと、自分のためにも良くないと気付いたのである。さっそうとデスクを

後にして、これからは教職ひと筋に、と思ったまでは殊勝であったが、たちまち手持ちぶさたをかこつようになつた。

そこで、いまいちばんしてみたいのは何か、と自問してみたら、すぐ、焼もの、という答が出た。

小学校の工作の時間で粘土細工を作り素焼にもらったことが一度だけあって、鋭い喜びを味わつた。それが三十年たつても忘れられない。あのろくろというものを回してみた。小学校では手も触れさせてもらえなかつたが、あれでものを作ることができたらどんなだろうと夢にまで見た。あまり長く考えていて夢は要するに夢だと半ばあきらめるように

なつた。そうだ、ろくろを回してみよう、そう思つたら矢もたてもたまらなくなつた。

そのころ勤めていた学校には芸術学科があつたから、手ほどきをしてくれる便があるかもしれないと思つて、彫塑の教師をしている友人にわけを話してたのんだ。

すぐ返事がきて、窯業実習があるから、学生と一緒によければやってくれて結構、指導に当たっているのは一般教養の英語で君が教えたSさんだ、こちらからも話しておく、とある。さあ、そうなつたら善は急いだ方がいい。さっそく実習室をのぞく。四十の手習いとはこのことかとひとり苦笑しながら。陶芸科という専攻があるのではなく、他学科の学生が選択単位としてとる実習がひとつ置かれているだけだから、設備はお粗末で、ろくろも電動、手回しが各々ひとつあるだけ。時間中は学生が使うのを見ている。授業が終わって

も熱心な学生はろくろの傍を離れようとしぬい。そういう学生も帰ってしまう夕方になってやっと老学生の順番になる。待ちくたびれて、口がかさかさになった。

裸電球ががらんとしたうす暗い教室にただひとつついていてる。ろくろのギアを入れるとびっくりするほど大きな音を立ててまわり出した。それを見て興奮して土をいい加減にのせたら、たちまち放り出されて、メガネにも飛び散って目が見えなくなった。

ろくろのセンターに土をのせるのがこれほど難しいものとは知らなかった。何十回くりかえしたかわからない。何日か目で、もういやになったころ、やっとセンターに納まってくれた。いくら回してもじつとすわっている土を見て涙が出そうであった。

学生たちは週一度の実習だが、四十の手習いにはそんなのんきなことを言っていられない。毎日ひまさえあればろくろの部屋へ行き、何時間でもねぼぼった。ひるでも電気がついてる暗い部屋のせいか外の暗くなるのもわからない。さてもう帰ろうかと腰を上げると外はまっくらということがしょっちゅうである。時のたつのを忘れた。おもしろくて、とは違う、うまく出来なくて夢中になっているうちに何が何だかわ

からなくなるのだ。

はじめて鶴首ができるようになった日など、五、六時間はひと休みもしないでいたらしい。家のものがそろそろ心配し出した。

紙の上の小さなインクのシミをにらんでいるのを、さもさも高尚と考えるのは、そもそもおかしいのではないか。そういう疑問がわいてきた。ものを本当に創るというのは、ペンさきで文字を操ったり、舌先き三寸の虚構をつくろうのとはまるで違う。造形の喜びとはこんなにすばらしいものだったのか、目からウロコの落ちる思いであった。

そのころ一緒にろくろを回した仲間には、すでにプロの作家になって個展をひらくまでになっている人も何人かいるのだが、こちらは相変わらず、下手な横好きのろくろを回すだけで、一向にもものにはならないが、それでもいいと思うようになってきた。ささやかながら自分の勉強にもこれが目に見えない影響を及ぼしているらしいからである。

それにしても、ものの初めには理屈を超える神秘があるような気がする。そのうちまた何か夢中になれそうなおもしろいことを始めてみたいと思っている。こんどは五十の手習いである。

(お茶の水女子大学)